

第2期中期目標期間
(平成22～27年度)
自己点検・評価報告書

平成28年3月
外国語研究教育センター

目 次

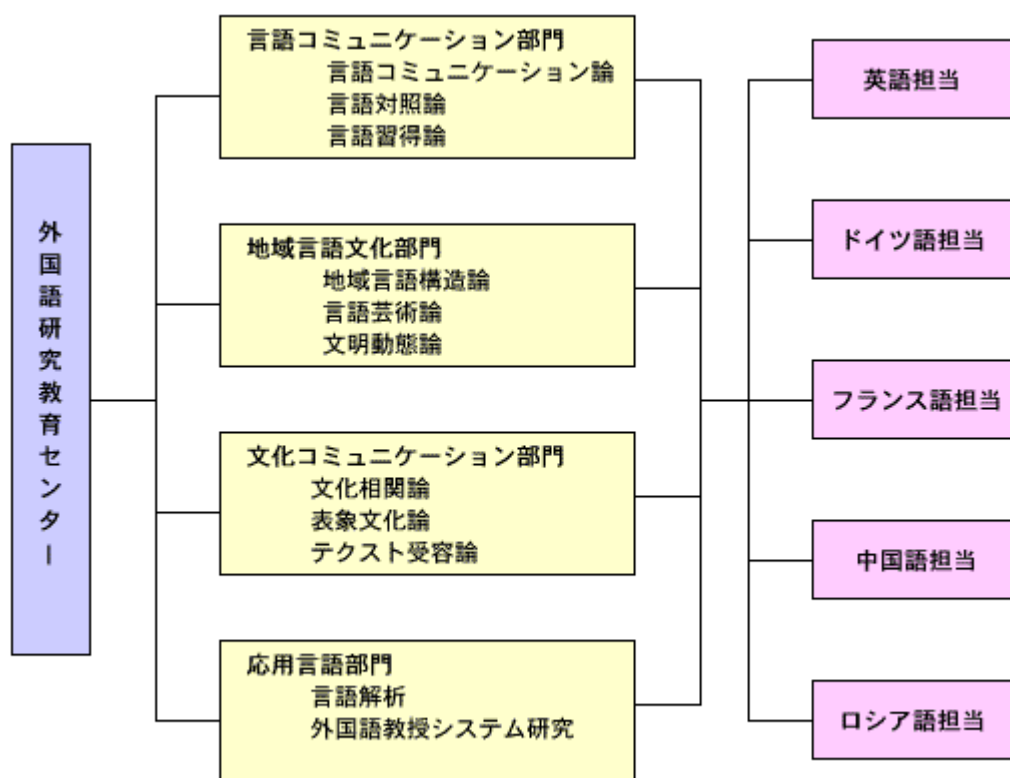
- I 中期目標期間の実績概要
- II 特記事項
- III 次期中期目標期間に向けた課題等
- IV 中期目標・中期計画ごとの自己点検・評価

I 中期目標期間の実績概要

1. 組織の特徴

外国語研究教育センターは平成8年度に旧工学部外国語群を母体として発足した。言語コミュニケーション、地域言語文化、文化コミュニケーション、応用言語という、互いに密接に関連しながら独立性を保つ4つの研究部門から構成されている。専任教員はいずれも、理工系大学にあって異彩を放つ人文科学系の研究者であり、上記4研究部門のいずれかに籍を置いて専門分野の研究に従事している。個々の教員は所属する諸学会で主要な役職を務めるなど、学界において中心的指導的な役割を果たしている。

(資料1) センター組織図



出典：外国語研究教育センター作成

センターの方針を決定する最高議決機関は、他部局の教員も委員として構成するセンター運営委員会であるが、センター固有の実務を担うのはセンター教員会議である。教員会議のもとには以下の各種委員会が設置されている。各教室の代表者及びセンター長によって構成される予算教務委員会、中期目標・中期計画の立案、遂行を目的とする中期計画委員会、教員の研究活動推進を目的とする FLC 言語文化研究会運営委員会、そして学生の学習支援に体系的に取り組む外国語学習サポートシステム運営委員会である。さらには第1期中期目標期間に導入したサバティカル制度を問題なく回転・機能させることを目的としたサバティカル実施委員会、PC による情報発信の充実とセキュリティー管理を目的とし

たネットワーク委員会，ホームページ管理委員会，紙媒体による活動報告・広報，紀要等における研究成果の発表を目的とする編集委員会などを加え，今日に至っている。

センターの教育活動の中心をなすのは，学部・大学院を対象とする国際コミュニケーション科目の授業運営である。国際コミュニケーション科目とは，学習者が将来直面するであろう言語・文化における異文化間の溝を乗り越え，相互理解に到達するために主体的に対応していく基盤となる能力の整備，発展を目指すもので，全学科目教育協議会の下に置かれる国際コミュニケーション科目実施委員会が教育内容及び教育の実施について責任をもって検討している。同科目は学部1年生から3年生までの全員に対し，英語，ドイツ語，フランス語，中国語，ロシア語の5外国語にわたり，14単位分の必修授業を展開している。のみならず，全学部生，大学院生を対象にした多彩な選択授業を開講し，すずかけ台キャンパスへの出講も行っている。

カリキュラムの開発もセンター特有の活動のひとつである。とりわけこの数年，平成28年度開始の全学新カリキュラムは最重要課題と認識し，旧制度内における教育改革の取り組みとも一部連動させつつ，きわめて積極的に抜本的な教育制度の見直しと新たな外国語教授法の開発を進めてきた。

英語に関しては，①「実践型科学技術英語海外研修」（モナッシュ大学）を新たに開講，②海外短期語学研修の成果を本学の国際コミュニケーション科目の単位とできるTASTE制度の派遣先大学を増加，③「海外留学」「国際意識醸成」「TOEFL」「学術英語」をキーワードとする新たな英語カリキュラム（英語第九）を策定するとともに，合格基準点をTOEICからTOEFLベースに変更する基本案を作成した。第二外国語についてはドイツ語，フランス語，中国語，ロシア語4語学の①選択必修を一年次から二年次（200番台）に移行し，イタリア語，スペイン語，韓国語を加えた第三外国語枠の導入を決定，②クォーター制に合わせた授業計画や教科書の作成ないしは選定を各語学単位で進めているほか，③一層の国際意識醸成を図るカリキュラムとして「外国語への招待」「国際文化論」の新規開講を策定，④大学院の外国語科目として「古典ギリシア語」「古典ラテン語」の導入を決定，講師の依頼，シラバス作成等の準備作業を行った。

このほか特にリベラルアーツ研究教育院におけるカリキュラム改革に関しても，多数の教員が積極的に参加，とりわけ新入生全員を対象としたリベラルアーツ・コア学修科目「東工大立志プロジェクト」では教科書の執筆編集・シラバス作成・パイロット授業等の準備や新制度での円滑な実施のために，複数の外国語教員がWG中心メンバーとして大きな役割を果たしている。

さらに専任スタッフについては，全体の3割近くを外国人が占め，また女性の比率も4割を超えており，いずれも全学平均に比較してきわめて高率である。この点も当センターの大きな特徴として挙げられる。

<教員の内訳>現員

教授	11
准教授	8
助教	1
外国人教師	1

（平成28年3月31日現在）

2. 実績の概要

「自己点検・評価」の項目で後述するように、期間中に多くの中期計画を達成している。

(1) 第1期中期目標期間中に始動した国際コミュニケーション科目カリキュラム改革の継続的見直しと改善

英語については第1期中期目標期間に始動した TOEIC スコア中心の新カリキュラムを継続しつつ、学生及び学内のニーズに応えるべく、各学科の定める TOEIC スコアに準拠した基準設定点（のち合格基準点）を合否基準に反映させるなど、さまざまな改善や補強を行っている。さらに、英語のリスニング及びスピーキングに関する上級クラスを担当し、学生の英語学習意欲や英語運用の知識や能力を高めるために設けられた英語母語話者非常勤教員からなる改革非常勤の積極的雇用と併せ、英語母語話者の教員による学部及び大学院の英語選択授業（英語使用）を10%以上増やしたほか、英語母語話者による短期集中講義を単位化、授業の種類も多様化し、選択肢を増やすことで、学生の学習機会を増やし、学習意欲を高めた。

第二外国語については、第二外国語科目 WG を中心に「第三外国語科目」導入を検討、学生アンケートの結果なども踏まえ、イタリア語と韓国語の2言語の導入を決定し、開講時期・履修方法・授業案を策定した。その途上、大学全体のカリキュラム改革が打ち出されたことから、第二外国語科目も含めた検討と変更を加える必要が出てきたため、当初の新規開講予定年度は順延されたものの、最終的に第三外国語導入案はスペイン語を加え、さらには自由選択の外国語科目として「古典ギリシア語」「古典ラテン語」を加えるなど、拡充・多様化したかたちで外国語学習の新カリキュラム全体に有機的に位置づけられ、活かされることとなった。

(2) 第3期中期目標期間で始動する全学新カリキュラムを見据えた国際コミュニケーション科目の拡充と展開

英語については、大半の学生に海外留学をさせるという本学新カリキュラムの方針を推進するかたちで、TOEIC に替えて TOEFL に準拠した到達度判定基準を導入する新たなカリキュラムを策定、さらには新カリキュラム始動に一步先んじて「実践型科学技術英語海外研修」の開講や TASTE 制度の派遣先大学の増加など、海外留学を授業や単位取得に積極的に組み入れるシステム構築を進めている。

一方、第二外国語については(1)で述べたように、第二外国語選択必修の二年度（200 番台）への移行に併せ、第三外国語の導入による未修外国語学習の拡充と多様化を行ない、クォーター制度にもより柔軟に対応できる統一教科書の選定ないしは作成等の準備を進めてきた。

(3) 外国の文化に関する学生の知識・教養を高めるための教育

センターは(1)(2)で述べた必修外国語を中心とする授業の充実とともに、単に外国語の運用能力を伸ばすことにとどまらず、外国文化に関する関心を涵養する教育を本学の学生に提供している。この点に関しても、第2期中期目標期間は、「世界文学入門」「オペラへの招待」など、第1期中期目標期間中に開始した文系教養科目への出向・協力に加え、「国際文化入門」の新設、さらには新カリキュラムでの始動が決定した新設科目「国際文化論」「外国語への招待」、大学院科目「世界を知る」の構想と策定など、学生にグローバルな視野を提供するためにさまざまな努力を行い、有機的な教育プログラム

を開発・発展させてきた。

(4) 学生の外国語学習意欲を高めるためのさまざまな活動

第1期中期目標期間中に始動した本センター独自の多面的な外国語学習支援システムを継続し、改善した。その中核をなす外国語学習相談室については開室時間を適宜変更・修正することで利便性を向上、自由参加型セミナー「第二外国語のサロン」を開いたり、English Café（特記事項1—(3)）、中期目標【6-1】に利用するなど、外国語学習への動機づけや語学力向上に向けての支援を積極的に行っている。また、外国語資料室に関しても、留学・検定試験関係の図書や視聴覚教材を補強した学生用ライブラリー、PCの設置など学生の学習及び留学への意欲を高めるための学習環境を整備している。

一方、スピーチ・朗読コンテストについては、英語・第二外国語ともに、時には授業とも連動しつつ、参加者の増加、(第二外国語について)参加語学の種類を増やすなど、改善・発展のための試みを重ねている。さらに春期休暇及び夏期休暇期間中の短期集中講義のコースの一部を単位化して拡充、学内の派遣留学準備等のニーズに合わせた課外授業イタリア語の実施や English Office Hours の設置など、課外での学習支援にも力を注入した。

(5) 教育・研究設備の改善と充実

西3号館の3つのLL教室を改修し、うち2つに電子黒板を導入したほか、外国語資料室の資料と機器の充実、書庫の数度の移転に伴い、蔵書を整理・再分類するなど、教育・研究設備についても、さまざまな改善を加えた。

(6) 多様な人材の発掘と登用

第2期中期目標期間中に本センター内の女性教員の比率は10%以上増加、外国人の比率も世代交代が進むなかで第1期中期目標期間中に達成した比率を維持するなど、教育スタッフの多様化を積極的に押し進め、男女共同参画と国際化を志向する全学の方針に大きく貢献している。

(7) 学内外への啓蒙及び広報活動

多彩な講師陣を招いての平均年2回のセンター講演会の継続開催、シンポジウム『「グローバル化」時代の外国語教育』の主催、広報誌『ニューズレター』の年1回の刊行、ホームページの拡充など、センターの活動を学内外に知らせるためのさまざまな活動を行ってきた。

II 特記事項

1. 優れた点

(1) 大学改革への積極的な取り組み

平成28年度開始の新教育システムに向けたカリキュラム改革に本センターはきわめて積極的な姿勢で取り組んできた。英語は三年次に全学生に海外体験をさせるという全学の方針にも合わせ、「海外留学」「国際意識醸成」「TOEFL」「学術英語」をキーワードとするカリキュラムを策定、合格基準点 TOEIC から TOEFL ベースに変更すべく基本案を作成した。第二外国語は従来的一年次4単位一外国語選択必

修というかたちから、二年次の必修への移行を決定、一年次は第二外国語学習への意欲を高めるための準備期間と位置付け、ガイダンスとしての自由選択科目を設け、また第三外国語を導入することで、二年次以降の履修のかたちに、学生の多言語多文化への視野を広げ、自主性を促すべく、柔軟性を持たせるにいたった。一方、改革後、同じ組織に属することになる他の部局の教員とも合同で、文系教養コア学修科目等を策定するワーキンググループに初期段階から参加、とりわけ全文系学修課程の出発点であり核となる「東工大立志プロジェクト」に関しては、教科書の執筆・編集、講師の選定と交渉、試行授業の運営に当センターの教員が主導的役割を果たした。また新組織及び新コア科目の準備のために平成26年度及び27年度に開催された各種講演会、シンポジウム及びFD合宿に関しても、一部、当センター教員が運営に携わり、センター教員全体としても出席率はきわめて高い。

(2) 多様多彩な人材の発掘・採用と確保

本センターに所属する全専任教員中、女性教員の占める割合は平成27年度で40%を大きく上回り、学内では突出している。また、外国人教員比率も約30%の高率となっており、全学平均比率を大幅に押し上げるのに貢献している。外国人教員比率、女性教員比率がともに30%の高さを記録する部局は全学において本センターのみである。本センターがいかに多様な人材の発掘・採用に積極的であるかということの証左といえよう。

(3) 授業運営以外の多様な活動

第1期中期目標期間内に立ち上げた外国語学習支援システムを柱としつつ、英語・第二外国語のスピーチ・朗読コンテスト、夏期及び春期集中語学講座、English Café, English Office Hours, 「第二外国語のサロン」などの定期的開催をはじめ、学生の教育支援のために、さまざまな活動を発展・展開している。また研究活動については、紀要「言語文化論叢」を毎年発行しているほか、第1期中期目標期間内の最後に審査付き学術誌「ポリフォニア」の発刊を実現、年数回の研究発表会とも連動させることで執筆と投稿を活性化させながら、毎年の刊行を継続している。

2. 特色ある点

(1) 理工系大学における特色ある人文科学系研究者の集団

所属教員の研究分野は文学、哲学、芸術、言語学、文化史など人文科学の広い領域をカバーし、個々の研究テーマも英米の詩、小説、演劇、英語学からドイツオペラ、フランス現代思想、ロシア美術史、日中美術史、日本文学、比較文化史、音楽学、心理学に至るまで多岐にわたっており、本学の理工系研究科はもとより人文科学系研究科においてすらなお欠落している部分を十二分に補っている。各教員に共通するのは、母語でない言語を駆使して研究に取り組んでいる点である。外国語習得の豊かな経験、外国語に関する深い知識、そして異文化への幅広い知見は学部生向けの国際コミュニケーション科目必修授業を支えるバックボーンとなっている。のみならず、おのおのの専門的学識は多様な選択科目（すざかけ台開講科目も含む）、自由参加型課外授業、センター外の文系科目、そして他研究科の大学院教育の場においても有効に活用されている。

(2) 各種入学試験（外国語）の出題及び採点を担当

毎年度、学部入学試験（前期及び後期）の出題及び採点を担当してきた。第2期中期目標期間中、平成23年度をもって、後期入試は全面的に廃止され、ドイツ語及びフランス語の入試も無くなった。現在残るのは前期入試の英語のみだが、大学入試全体におけるその重要性は未だ大きく、さらに編入学試験、私費留学生特別選抜、帰国子女特別選抜の出題及び採点、希望する専攻に対して大学院の英語入学試験問題に関する専門的見地からの助言指導を行っていることも併せて、指導する学生を持たない部局としての入学試験への貢献度はきわめて高いといえよう。

(3) 外国語教育についての新たな実験的試み

第1期中期目標期間から英語は卒業要件基準点としての TOEIC スコアの利用、習熟度別クラスなど新たな試みを導入、第2期中期目標期間内には授業の改善と拡充に努めたほか、例えば「東工大英単語」の策定・執筆・出版をはじめ、この試みをサポートし、機能させる工夫と努力を重ねながら、全学の方針により適合する TOEFL 重視のシステムへの移行を決定するに至った。一方、第二外国語も第三外国語の導入を決定したほか、新カリキュラムに適合すべく、統一教科書選定及び作成に取り組んだ。

(4) 学内の国際化及び教養教育強化への貢献

スタッフの人材確保及び各語学の授業・学習支援活動の両面で、学内の国際意識醸成に大きく貢献するとともに、学内からの提携校への派遣交換留学に関しては筆記と面接両方の選考試験、留学フェアほかのオリエンテーション、派遣を控えた学生への学習相談と個人指導など、さまざまな協力を行っている。また、文系教養科目においても、「世界文学入門」「オペラへの招待」「国際文化論」等の担当で欠かせざる一角を占めつつ、コミュニケーション力と多言語多文化への理解に基づく幅広い教養の重要性を学内にアピールしている。

Ⅲ 次期中期目標期間に向けた課題等

(1) 新たな外国語教育の模索と東工大に即した特色の確立

Ⅱ－2. 「特色ある点」(3) で述べたように、当センターは英語・第二外国語ともに、外国語教育の新たな形を作り出すべく、さまざまな試みを重ねてきたが、新カリキュラムが始動する今現在の状況に対応した教育システムは未だ完成したわけではないし、現在のグローバル情報社会のめまぐるしく動く状況に合わせて変化する学生や社会のニーズにも、柔軟に対応する必要がある。ここまでの成果を活かす意味でも、第3期中期目標期間の課題として、英語に関しては TOEFL 中心授業が3年次の学生海外留学にどのような効果を及ぼすか、第二外国語に関しては統一教科書が学生の語学力及び異文化理解に及ぼす効果、第二外国語必修の二年次への移行及び第三外国語導入による学生の外国語学習意欲の向上について、検証を重ねつつ、修正・改善していくことが必要となる。

(2) 学生の目線に立った学習支援システムの開発

授業外の学習支援システムについても、(1) と同じ意味で、検証・改善が必要になる。とりわけ、全学生が三年次に留学する状況の中で、準備・オリエンテーションも含めた学習相談のシステムの構築、新たに加わる第三外国語科目を春期・夏期講座に加える可能性についての検討が喫緊の課題として考えられる。

(3) 新組織における研究・教育活動の積極的・横断的な協力

I－1 「組織の特徴」の後半及びⅡ－1 (1) 「大学改革への積極的な取り組み」でも述べたように、センター教員は文系教養コア科目の策定と準備をはじめ、他の部局からリベラルアーツ研究教育院に所属する教員たちとの間にすでに密で良好な協力体制を構築しつつある。今後はこの関係を研究活動にも広げ、分野の異なる教員間の(科研申請・取得をも含む)共同研究、多分野にわたる多彩な講演会や研究発表会等に発展させ、組織全体を活性化していくことが望まれる。

IV 中期目標・中期計画ごとの自己点検・評価

1. 教育に関する目標

(1) 教育内容及び教育の成果に関する目標

中期目標 「I-1-9.学生の外国語運用能力のみならず、外国文化に関する知識・教養をも高める。」

中期計画「現在、当センター教員がボランティアで行っている文系科目への出向授業（文系導入科目「世界文学入門」、文系基礎科目「オペラへの招待」）をさらに推し進め、外国語学習の枠とは別に、外国文化に関する知識・教養を高めるためのプログラムを充実させる。」

<実施内容と達成状況>

文系科目「世界文学入門Ⅰ」（オムニバス）について、平成23年度より、「英語圏文学」に充てられていた講義を「イギリス文学」と「アイルランド文学」の2回に分けて実施することで、講義内容の充実を図った。また、「世界文学入門Ⅱ」の開講について検討を行い、その結果、世界の多様な地域の文化・社会をリレー形式で講義する「国際文化入門」を新設し、平成24年度は春期集中講義として、平成25年度からは毎年度後期に開講するに至った。

さらに、平成28年度以降の教育改革に際して、「国際文化入門」を拡充することとし、文系科目「国際文化論：アジア・アフリカ」「国際文化論：ヨーロッパ・ラテンアメリカ」「外国語への招待1」「外国語への招待2」を新設し、一層の国際意識醸成を図るカリキュラムを策定した。また、修士課程の文系教養科目として、ヨーロッパ、東アジア、中南米、南・東南アジア、中東・アフリカ、北米・オセアニアの6地域のそれぞれについて地域文化論を講義する「世界を知る」6科目を新設し、グローバルな視点から外国文化に関する知識・教養を高めるためのカリキュラムを策定した。

<自己評価判定>

「中期計画を上回って実施している」（Ⅳ）

<今後の課題>

「世界文学」「国際文化論」「外国語への招待」などオムニバス形式の各講義科目について、内的な連関及び科目としての統一性を一層高めることで、授業の質の向上を図ること。

中期目標 「I-1-2-1.より広い視野と国際性（交流力）を涵養するために、第二外国語の基礎的運用力を育成し、高める。」

中期計画「現行の第二外国語の朗読・スピーチコンテスト「第二外国語の夕べ」を、授業や留学により有機的に関連付けるよう、参加者選抜方法及び内容を改善し、質を高める。」

<実施内容と達成状況>

第二外国語の朗読・スピーチコンテストについて、平成22年度より名称を「第二外国語の夕べ」から「第二外国語の競演」に変更し、特に水曜午後の第二外国語科目と有機的に関連づけて開催した。ま

た、コンテスト参加者については従来のドイツ語・フランス語・中国語に加えて、平成 23 年度からはイタリア語、平成 26 年度からはロシア語による参加者を加え、プログラムを充実させた。「第二外国語の競演」の開催に際しては、教員が正規授業時間に加えて課外に指導時間を設け、参加者の外国語運用能力の向上につなげた。

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

<今後の課題>

広報宣伝の充実等を通じて、コンテストの参加者及び参観者を増やすこと。

中期目標 「I-1-2-2.学部及び大学院生を対象とした、質が高く充実した英語学習カリキュラムを開発する。」

中期計画【5-1】①英語母語話者の教員による学部及び大学院の英語選択授業（英語使用）を 10%以上増やす。

【5-2】②上記項目①の授業に関して種類を多様化し、学生の選択肢を増やす。

【5-3】③英語母語話者教員による短期集中講義を単位化し、学生の英語学習の動機付けを高め、学習機会を増やす。」

<実施内容と達成状況>

- ① 別表のとおり、全体で 10%以上増加させた。
- ② 別表のとおり、種類を増やして、学生の選択肢を増やした。
- ③ 平成 25 年度後期から短期集中講座の一部単位化を実現した。

以上のように、学習機会を増やし、学生の英語学習の動機付けを高めることを図った。

別表 平成 21 年度と平成 27 年度における英語母語話者担当の英語選択授業の種類及びクラス数

	種類	クラス数
平成 21 年度	9(学部 5 院 4)	34(学部 16 院 18)
平成 27 年度	15(学部 10 院 5)	60(学部 31 院 29)

※ 上の表で種類が増加しているものの、主な具体例

(学部) 英語口頭表現演習 GI・GII, アカデミックプレゼンテーション AI, BI・BII, アカデミックリーディング BI・BII, 英語スピーチ演習

(大学院) アカデミックプレゼンテーション基礎 CI・CII

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

<今後の課題>

広報宣伝の充実等を通じて、選択授業及び短期集中講座の受講者数を増やす。授業内容や形式の検討を重ねて、開講クラスの種類や数を適正に保つ。

中期目標 「I-1-2-3.授業以外の場において高度な英語を学ぶための機会を増やす。」

中期計画【6-1】①自由参加型課外活動の戦略的充実をはかる。

【6-2】②学部及び大学院生を対象とした英語関連のイベントを実施する。」

<実施内容と達成状況>

- ① 英語母語話者専任教員が学生や教職員を対象に昼食をとりながら会話訓練を行う English Café, また英語母語話者の非常勤教員(改革非常勤)が学生の英語学習上の相談に対応する English Office Hours を設け、課外での英語学習支援を行った。
- ② 毎年学部生及び大学院生を対象に English Speech Contest を開催するほか、平成 27 年 2 月 24 日には、「リベラルアーツが動き出す シリーズ講演会 第2回」として『『グローバル時代』の外国語教育』(講師：斎藤兆史(英語, 東京大学教授), 堀茂樹(フランス語, 慶應義塾大学教授), 増本浩子(ドイツ語, 神戸大学教授)を開催して好評を得た。

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

<今後の課題>

課外活動に関しては、参加を希望する学生の便宜をより図る体制を整える。イベントについては、学部、大学院を問わず学生が今以上に参加しやすい企画を考案する。

中期目標 「I-1-4.国際性を備えた社会のリーダーとなる人材に求められる国際コミュニケーション能力の育成方針を策定し、それに基づく教育・指導をおこなう。」

中期計画「国際コミュニケーション科目に関して、基礎力を確保しながら創造性を発展させるために、教育内容及び評価方法の見直しと改善を進める。

【10-1】①世界最高水準の理工系大学を目指す本学の学生に履修機会として提供すべき外国語の種類及び達成水準を定める。

【10-2】②各外国語について学生が履修により到達すべき具体的目標の改定を進める。

【10-3】③英語については、到達度判定の基準として TOEIC に加えて、TOEFL 等の標準化試験を採用し、バランスのとれた評価方法を開発する。

【10-4】④「基礎力」から「創造力」への展開をめざした国際コミュニケーション科目教育方法及び

評価方法の開発を進める。

＜実施内容と達成状況＞

- ① (i) 英語に関して、達成基準として TOEIC スコアに準拠した到達目標点を定め、TOEIC スコアによって成績が付与され、単位が認められる英語 5、また、英語 5 の単位を修得できなかった場合に、代わりに単位習得が可能で、授業による指導と組み合わせるうえで、英語 5 と同様に TOEIC スコアの向上を目指すことを通して英語力強化を図る英語 6 及び 7 (5, 6, 7 はそれぞれ単位を修得するセメスターに対応する) の運用に用いた。
- (ii) 第二外国語に関して、当センター内に第二外国語科目改革 WG を立ち上げ、まずは平成 22 年度末に「第三外国語科目」の導入に向けた学生アンケートを実施した。このアンケートの結果を踏まえ、平成 23 年度に、第三外国語科目として既存の 4 言語 (ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語) に加えてイタリア語と韓国語の 2 言語の導入を決定した。このうちイタリア語については、正規カリキュラム外の試行授業として、非常勤講師による夏期集中講座及び後期 2 コマの講義 (「イタリア語初級文法」「イタリア語初級会話」) を実施するに至った。平成 25 年度には、第三外国語科目の開講時期・履修方法・授業案を策定し、教育推進会議等に諮った結果、当初の新規開講予定年度を順延するかたちで平成 28 年度以降の新カリキュラムに組み込むことが決まった。新カリキュラムの構想と策定を通して、第三外国語として上記既存 4 言語に加えてスペイン語・イタリア語・韓国語の 3 言語の初級科目を新設し、第三外国語科目の履修をもって卒業・修了要件にできることを決定した。さらに、自由選択の外国語科目として「古典ギリシア語」「古典ラテン語」を加えることを決定し、外国語科目の拡充と多様化を図った。
- ② (i) 英語に関して、到達すべき具体的目標として、①に記した到達目標点のほか、各学科の定める TOEIC スコアに準拠した基準設定点 (のち合格基準点) を用い、英語 5, 6, 7 の合否の基準としている。
- (ii) 第二外国語の初級・中級科目に関して、検定試験の受験を促すなど、学生が学習目標を立てやすくするための指導を行っている。また、水曜日午後に関講している各外国語の母語話者教員によるセミナーは、国際室の派遣交換留学制度と連携しながら、留学支援を具体的な目標に定めている。
- ③ 平成 28 年度から新しい英語カリキュラムを策定し、ここでは TOEIC に替えて TOEFL に準拠した到達度判定基準を導入することになった。
- ④ 平成 28 年度以降の大学改革において、国際意識醸成、学術英語指導、前二者を踏まえた TOEFL による到達度判定基準導入を 3 本柱とする新しい英語カリキュラムを策定した。

＜自己評価判定＞

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

＜今後の課題＞

新カリキュラムの円滑な実施と必要な修正を適宜行って充実した授業を学生に提供する。大学改革の精神に即した、特色ある東工大らしい英語教育、外国語教育の確立を目指す。

(2) 教育の実施体制等に関する目標

中期目標 「I-1-5.FD活動の活発化をはかる。」

中期計画「【12-1】①FD研究会を開催するとともに学外のFD研究会に参加し、FD関係の有益な情報を蓄積する。

【12-2】②FDの成果を活かし、カリキュラム改革並びに授業改善を行う。」

<実施内容と達成状況>

① (i) 全国規模の研究会である「大学教育フォーラム」並びに「大学生研究フォーラム」に毎年度参加して、FDに関する最新の知見を継続的に得ることに努めている。また、「全国英語教育学会」を始めとする各種学会への参加を通じて、外国語教育に関する情報・資料を収集し、学外の専門家との意見交換を行っている。さらには、金沢大学外国語教育研究センターの視察(平成22年度)、京都大学及び立命館大学の視察(平成26年度)、シンポジウム『『グローバル時代』の外国語教育(講師:斎藤兆史(英語,東京大学教授),堀茂樹(フランス語,慶應義塾大学教授),増本浩子(ドイツ語,神戸大学教授))』(平成26年度)、講演会「清華大学における第二外国語教育について(講師:王成(清華大学教授))」(平成26年度)等を通じて、グローバル化時代の外国語教育のあり方について、国内および海外の専門家との情報意見交換の機会を継続的に設けてもいる。他方、当センター内においても、カリキュラム及び授業方法の改善を目指して、教員間で自主的なFD研究会を立ち上げ、会議や研修会を継続的に開催している。

(ii) 平成26年度末及び平成27年度末には、新組織リベラルアーツ研究教育院立ち上げと授業準備のために、文系教員と合同でFD研修合宿を開催し、そのなかで外国語科目のカリキュラム説明や模擬授業を実施した。

② 上記の活発なFD活動の成果を活かし、適宜授業改善を行ってきたほかに、平成28年度以降の教育改革にあたって英語科目と第二外国語科目の新カリキュラムを策定した。また、新組織リベラルアーツ研究教育院が提供する文系のコア学修科目「東工大立志プロジェクト」「リーダーシップ道場」のカリキュラム・教案の策定やパイロット授業の実施にあたって、当センター構成員が主導的な役割を果たした。

<自己評価判定>

「中期計画を上回って実施している」(IV)

<今後の課題>

FD活動の一層の体系化と活発化を通じて、本学の外国語教育に適した教材の開発や授業の改善を行うべきである。

中期目標 「I-1-6.新しい授業形態に適した教育環境・設備の整備を進める。」

中期計画「教育現場の声を参考にして3つのLL教室を順次改修する。」

<実施内容と達成状況>

当センターが管理する西3号館の3つのLL教室を順次改修した。平成24年度には、グローバル人材育成事業に関わる予算を利用し、第1LL教室及び第3LL教室に電子黒板を導入した。

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

<今後の課題>

インタラクティブな授業に適したLL教室の改修を継続的に実施する。

中期目標 「I-1-10.より効果的な外国語学習支援システムを構築し、学生の語学力を効率的に高める。」

中期計画【75-1】①学生の外国語学習のニーズにより合致するよう、外国語学習相談室の相談システムを改善する。

【75-2】②学生の効果的な外国語自習を支援する様々な教材を外国語資料室に充実させる。」

<実施内容と達成状況>

- ① 外国語学習相談室の開室時間を適宜変更・修正することで利便性を向上させた。平成25年度には外国語学習相談室にて自由参加型セミナー「第二外国語のサロン」を開くなど、外国語学習への動機づけや語学力向上に向けての支援を積極的に行った。
- ② グローバル人材育成事業に関わる予算等を利用し、留学準備、検定試験に関わる図書を外国語資料室に増加させた。平成25年度からは、留学意欲を高めるための学生用ライブラリーの本格的構築と運営を開始し、留学コーナー、各種パンフレットコーナー、推薦書コーナーを設置した。また平成26年度には、2台のPCを設置して学習環境を整備し、併せて視聴覚教材を充実させることで資料閲覧の便宜を図った。

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

<今後の課題>

外国語学習相談室、外国語資料室ともに、一層の利用拡大を図る。

2. 研究に関する目標

(1) 研究実施体制等に関する目標

中期目標 「I-2-4.優れた研究者をインセンティブを付与という形で評価する体制を構築する。」

中期計画「教員個人評価と競争的資金の付与を連動させる評価システムを導入する。」

<実施内容と達成状況>

センター内で競争的研究資金として、プロジェクト経費を計上、各自の申請内容に基づき、競争的に配分している。また、科研費等外部資金の申請と取得の実績や学内の教育・運営に対する貢献度を、サバティカル取得の順番に反映させた。

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

<今後の課題>

全学的に予算が厳しくなっている中で、現在機能している当該システムを新組織においても発展的に存続させるための工夫が必要である。

3. その他の目標

(1) 社会との連携や社会貢献に関する目標

中期目標 「I-3-4.研究活動の成果を社会に還元する。」

中期計画「外部に開かれた啓蒙的な講演会、研究会の開催を現状より10%増やす。」

<実施内容と達成状況>

毎年2回、さまざまな専門研究分野を持つ外部の講師を招き、多岐にわたるテーマの講演会を開催しているほか、平成27年2月には語学教育の専門家数名を招き、シンポジウム『「グローバル化」時代の外国語教育』を学内で主催した。これらのイベントを積極的に実施した結果、第1期中期目標期間と比較して、外部に開かれた啓蒙的な講演会、研究会の開催は10%以上、増加した。

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

<今後の課題>

引き続き、講演会を企画する。

4. 業務運営の改善及び効率化に関する目標

(1) 組織運営の改善に関する目標

中期目標 「II-1-3.優秀で多様な人材を発掘、登用する。」

中期計画「外国人教員、女性教員の高い比率を維持し、全学平均の押し上げに貢献する。」

<実施内容と達成状況>

現在、本センターにおける外国人教員は6名、女性教員は9名(外国人教師含む)。現員21名のそれぞれ約30%、約45%を占める。これは全学においてみればかなり高い比率であり、特に女性教員の占める割合は第1期中期目標期間終了時と比較しても飛躍的に増加した。

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

<今後の課題>

外国語教育の内容をより充実させるため、優秀な人材の確保と、教員間の多様性を高める努力を続けること。

(2) 事務等の効率化・合理化に関する目標

中期目標 「Ⅱ-2-1.事務負担の増大及び必要とされる作業の多様化に対応するため、事務担当職員的能力を向上させ、より効率的に事務作業を進める。」

中期計画「事務担当職員的能力向上、職員間の協力態勢の再構築、職員と教員の協力体制の強化、以上三点を実現させるため、WGによる調整と内部研修を実施する。」

<実施内容と達成状況>

第2期中期目標期間中に専任事務員が漸次削減され、平成26年度からはゼロになった。この厳しい状況のなか、非常勤事務員のみで授業運営、学生支援、予算管理などの事務をこなしてゆくべく、外国語準備室内での仕事分担の効率化を図り、密な協力体制を築き上げたほか、社会理工事務、教務との連絡体制を大きく改善した。

また、事務上の課題を解決するために、内部研修を随時実施した。主に英語5、6、7の運営に関わるスコア管理方法や学生対応、掲示方法に関する改善について、研修を通して教員と事務員の間で具体的な話し合いと問題解決作業を行った。(主な研修：旧カリキュラム英語5/6/7用 TOEIC 登録スコア更新受付方法、同成績集計データに関する教務および業者への報告方法、等。)

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

<今後の課題>

従来の各外国語の授業に加え、リベラルアーツのコア科目をはじめ、全学の新カリキュラムに対応した科目が教員の担当に加わるため、そのための支援体制をも含め、新たに仕事分担を見直し、効率化する必要がある。

5. 財務内容の改善に関する目標

(1) 外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加に関する目標

中期目標 「Ⅲ-1-1.センターの果たすべき役割及び各構成員の追求すべき専門分野に関連する外部資金獲得の方途を調査・整理し、組織的戦略的に応募する体制を確立する。」

中期計画「【54-1】①「外部資金獲得方法検討委員会（仮称）」を設置し、センターとして組織的に外部資金獲得に取り組む。

【54-2】②「外部資金獲得方法検討委員会」を中心に外部資金獲得方法の調査・整理をおこなう。

【54-3】③外部資金への応募及び獲得をセンター構成員に促す方策を検討し、制度化する。」

<実施内容と達成状況>

- ① 外部資金獲得ワーキンググループを設置して外部資金獲得についての方策を審議した。
- ② 外部資金獲得ワーキンググループにおいて外部資金獲得方法の調査・整理を行った。
- ③ プロジェクト経費の運用のほか、平成 27 年度以降はとくにリベラルアーツ研究教育院に参集する教員間の同趣旨のプロジェクトやイベントに参加するよう教員に促すなどして意識醸成に努めた。
- ④ 科研費の応募及び採択数については、今回の中期計画開始直前の平成 21 年度に比べてワーキンググループ活動以降、平成 23 年度、24 年度と続けて大きく増加を示した。（平成 21 年度： 応募件数 3，採択件数 0，平成 24 年度： 応募件数 5，採択件数 2）ただし、その後応募件数、採択件数いずれも縮減の方向に向かっており、さらなる強化策が求められる。
- ⑤ プロジェクト経費は平成 22 年度から 27 年度にいたるまで以下のとおりに実施され、プロジェクト経費を必要とする教員からの申請に応じて配分されている。（配分の総額はその年度の予算に応じて決定される。）

平成 22 年度 2, 000, 000 円

平成 23 年度 2, 200, 000 円

平成 24 年度 700, 000 円

平成 25 年度 1, 850, 000 円

平成 26 年度 3, 900, 000 円

平成 27 年度 2, 900, 000 円

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

<今後の課題>

リベラルアーツ研究教育院内で外部資金獲得のための活動に積極的に参加、また企画に携わる。教員間で外部資金獲得について情報交換等の機会を増やす。

6. 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標

(1) 評価の充実に関する目標

中期目標 「IV-1-1.教員個人評価と外部評価を一元化する。」

中期計画「個人評価と外部評価を連携させる新たな評価システムを立ち上げる。」

<実施内容と達成状況>

2002年度以降実施される外部評価結果を評価項目に反映させた上で、個人評価を実施し、各教員に結果を報告し、その結果をプロジェクト経費やサバティカル制度に一定程度反映させた。

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

<今後の課題>

リベラルアーツ研究教育院において新たな取り組みを新たな枠組みで計画する必要がある。

7. その他業務運営に関する目標

(1) 施設設備の整備・活用等に関する目標

中期目標 「V-1-1.研究・教育環境の戦略的整備を行う。」

中期計画【63-1】①教育現場の声を参考にして3つのLL教室を順次改修する。(再掲)

【63-2】②センター図書スペースの有効利用をはかり、利便性を高める。

【63-3】③既存スペースをセミナー、課外授業、研究会等多目的に活用する。」

<実施内容と達成状況>

- ① 当センターが管理する西3号館の3つのLL教室を順次改修した。平成24年度には、グローバル人材育成事業に関わる予算を利用し、第1LL教室及び第3LL教室に電子黒板を導入した。(再掲)
- ② センター図書室については、複数回の移転に対応しながら、より有効に利用できるようレイアウトの変更や書籍の整理等を行った。
- ③ English Caféの会場や、一部補習授業、教員が所属する学会の会議、またセンター内の研究会やFD研修等に積極的に利用した。(現在は西9号館1階に移動。)

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している」(Ⅲ)

<今後の課題>

- ・ インタラクティブな授業に適したLL教室の改修を継続的に実施する。
- ・ 増加する書籍の整理に努め、重要な研究資源の確保に努める。
- ・ 学生の学修や教員のFD、研究活動のためにより積極的な利用が必要である。